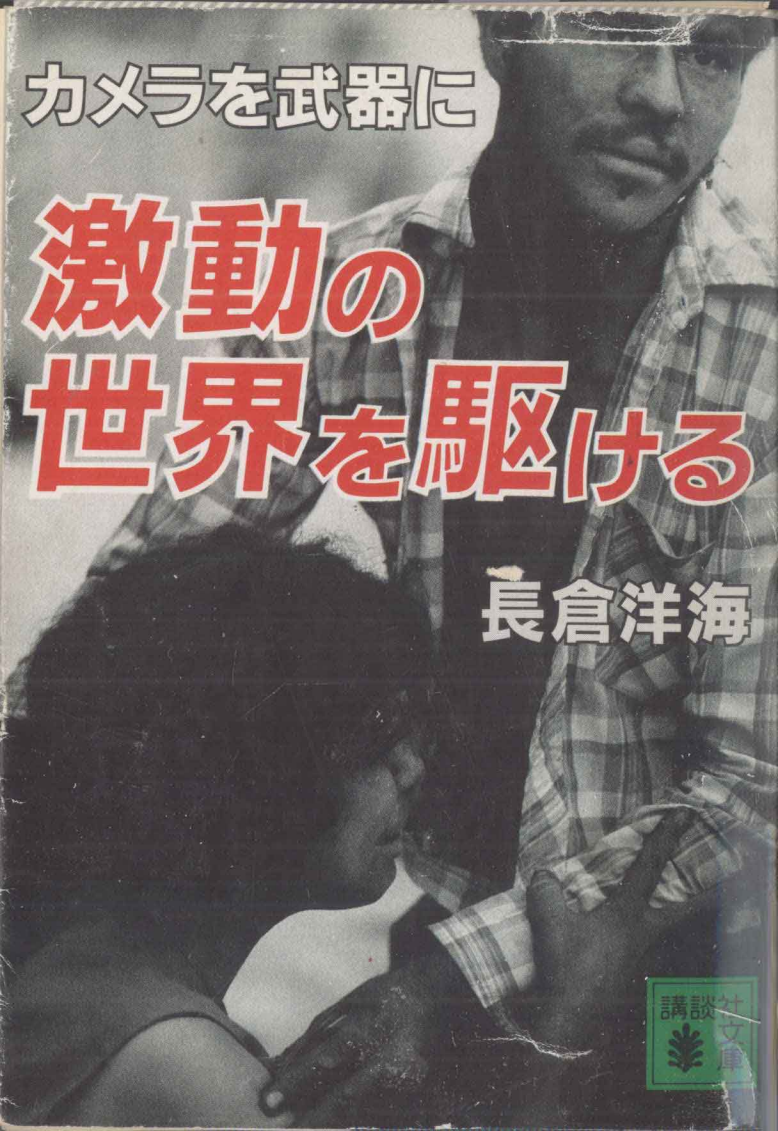




カメラを武器に

激動の 世界を駆ける

長倉洋海

講談社
文庫

著者|長倉洋海 1952年、北海道釧路市生まれ。同志社大学法学部卒。
時事通信社写真部を経て、現在、フリーのフォト・ジャーナリスト。'80
年より、世界の紛争地を回り、そこに生きる人々の姿を追ってきた。'83年、
日本写真協会新人賞受賞。著書に写真集『ゲリラ・七つの戦線』(未来社)
『内戦—エルサルバドルの民衆』(晩聲社)『峡谷の獅子—司令官マスード
とアフガンの戦士たち』(朝日新聞社)『フィリピン—我が祖国(バヤンコ)』
(れんが書房新社)がある。

げきどう　せ　かい　か
激動の世界を駆ける

ながくら　ひろ　み
長倉洋海

© Hiromi Nagakura 1987



講談社文庫

定価760円

昭和62年12月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——共同印刷株式会社

印刷——共同印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは総合編集局あてにお願いい
たします。(総B)



講談社文庫

カメラを武器に

激動の世界を駆ける

長倉洋海

目次

- 一、フリーランスへの旅立ち
- 二、内戦「エルサルバドル」
- 三、ベイルート大虐殺
- 四、英雄マスードとの百日間
- 五、ベイルート脱出
- 六、イスラム革命下のイラン
- 七、エルサルバドル再び
- 八、激動のフィリピンで
- 九、新たな世界地図

あとがき

解説 船戸与一

七

八五

一七五

一九七

二七九

三〇三

三三七

三九三

四五五

四六六

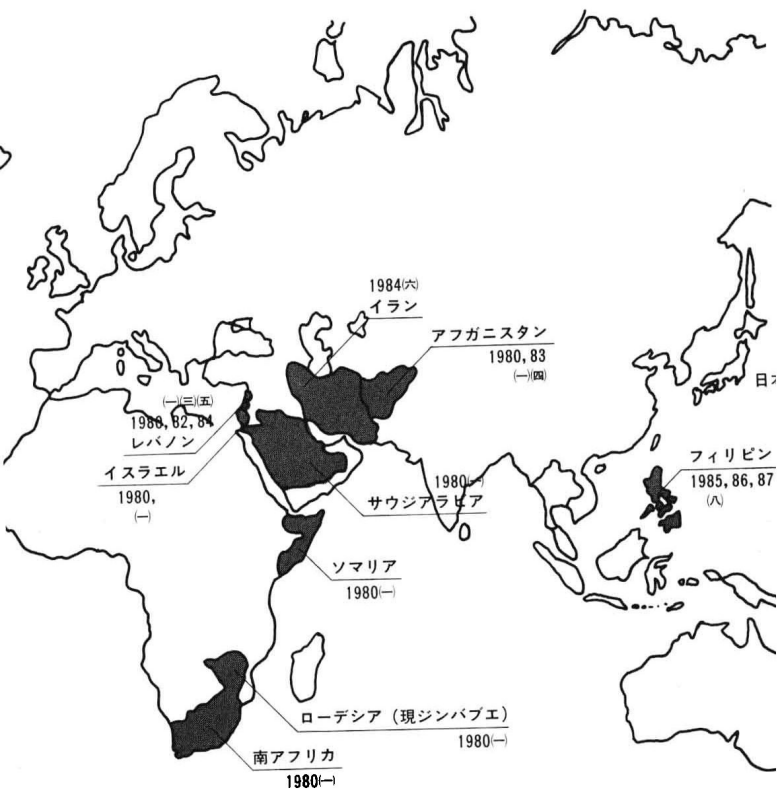
四六八



エルサルバドル
1982, 1984~85
(二七)

取材した国

数字は訪ねた年（西暦）、（ ）内は章



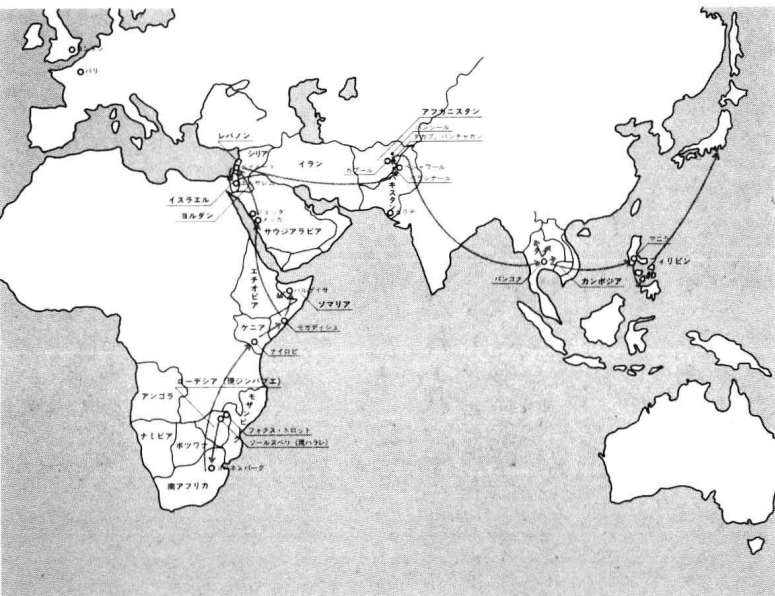


出発の準備をする長倉洋海

画・井上孝重

一、フリーランスへの旅立ち

(一九八〇年二月～八一年一月)



ローデシア（現ジンバブエ）へ

「ゲリラ側で独立の瞬間を撮るって？ 彼らが敗れたら殺されっちまうぜ！」

——そんな仲間たちの声を背に、私はゲリラ・キャンプに向かった。

一九八〇年二月二十日、それまで勤めていた通信社を退職した私は、自らの意志で単身、パリ、ロンドン、ヨハネスバークを経由してローデシア（現ジンバブエ）に入った。入国手続きを終えて、飛行場から首都ソールズベリ（現ハラレ）に向かう。私の乗りこんだリムジンバスは何度も、路上を閉鎖したバリケードの前で止められる。検問所だ。その度に政府軍兵士が中を覗き込む。手には、迷彩塗装を施した銃が握られている。バスの外の闇の中にも、兵士の目が光っている。冷たい汗が背中をつたう。それは、冬の日本からやってきた私の厚着のせいばかりではなかった。ここから私のフリーランスとしての第一歩が始まるという緊張とが入り混じったものであった。新聞のベタ記事を通してしか知らなかったローデシアが闇に包まれて目の前に広がっている。私は間違いない、その大地の上に立っている。

南部アフリカで、モザンビークとアンゴラの白人支配が崩れ、白人の少数支配は大きく揺ら

ぎ始めていた。南アフリカと並ぶ白人帝国ローデシアでも、五パーセントの白人の支配に抗議する黒人の組織・愛国戦線ゲリラが立ちあがり、白人の政府軍との間でもう七年にわたり内戦が続いている。すでに二万人が死亡した。内戦のこれ以上の激化を恐れた旧宗主国イギリスが仲介に入り、国民一人一票の総選挙が行われることになった。白人側には、今回の選挙で百議席中二十議席が割り当てられ、一応白人は表面上政治の表舞台からは身を引いたように見えるが、実は黒人穩健派との連合で、政治の実権を握ろうとしている。だが、いずれにしろ、黒人穩健派か愛国戦線による「初の黒人国家」が誕生することは間違いないようだ。

私はその「独立の瞬間」を記録するためにローデシアにやってきたのだ。首都のソールズベリには世界中から三百人以上のジャーナリストが集まっており、まだまだヨーロッパ・アフリカのジャーナリストが続々と駆けつけている。世界のジャーナリストがこんなに集まった中で、私にいい仕事ができるだろうか……。

問題は、私がどこで「その瞬間」を撮影するかだ。そうだ！白人支配をゆるがし、この選挙までもってきた愛国戦線ゲリラのキャンプで「独立の瞬間」を撮ろう。私はそう考えた。彼らの瞬間の表情を撮影することが「歴史的な写真」を記録することになると思ったのである。私は愛国戦線ゲリラ・キャンプへ急いだ。

ゲリラ・キャンプへ

総選挙の投票結果が、明日ラジオで発表されるという前日、私は、同じゲリラ・キャンプに向かうというもう一人のジャーナリストと組んで車を一台チャーターし、モザンビーク国境に近いゲリラの集合地点フォクス・トロット（FOX・TROTT）に向かった。ゲリラたちは停戦で、二十近くのキャンプに集合しており、その中でもフォクス・トロットは三千人のゲリラが集まっている最大のキャンプだ。

ソールズベリで雇ったオンボロ・タクシーは、途中で何度かエンストを起こし、埃を浴びながら山道を走っていく。車の中から見ると、鉄条網で囲われた農地にはトウモロコシが高く、びっしりと実っている。彼方に立派な邸宅が見える。白人の農園なのだろう。車は黒人の居住区に入っていく。トウモロコシの密度はまばらになり、丈も低い。黒人の運転手が言う。「俺たちにはこんな土地しか与えられないのさ」

この時世界の報道関係者は、選挙は白人・穏健派の辛勝に終わり、それに不満を持つであろう愛国戦線ゲリラとの間に再び内戦が始まるであろうと予測していた。そして、アンゴラに駐留していたキューバ兵が、愛国戦線に肩入れして参戦するという情報もあった。

車が走り始めて六時間後、やっとフォクス・トロットがあるという山のふもとに着く。突然、車の前にパラパラと数人のゲリラが現れた。司令官のところに連れていくと言う。



キャンプに集合した愛国戦線のガナ





手製のドラムやギターで楽しむゲリラたち

司令官は、冷厳な感じすらする落ち着いた男だった。説明には長い時間を要したが、我々の取材許可を出してくれた。

水を運んでいるゲリラ、夕食の準備に忙しいゲリラ、バレーボールをしているゲリラが見える。広場では大勢のゲリラたちがベニヤ板を張り合わせたギターや簡単な手製のドラムで、歌を奏でていた。回りで兵士たちがリズムにあわせて身体を軽くゆらして、踊っている。少年兵や女性ゲリラもいる。日が落ちかけていたが、誰もキャンプを立ち去ろうとはしない。明日発表される選挙の結果いかに、彼らの将来が決まるのだ。

日が落ち、撮影を切り上げた我々に運転手が突然、「帰る」と言いだした。キャンプへの途中の車の中で「ゲリラ側が勝てば、白人政府軍がクーデターを起こし、集合しているゲリラ・キャンプ目がけて爆撃してくるだろうし、もしゲリラ側が負ければ、怒りの余り彼らに殺されるかもしれない……」と我々は話しあっていたのだった。運転手は実際にゲリラ兵士を見ていて怖くなったのだろう。我々の説得のいかにもなく、車と共にソールズベリに帰ってしまった。しかし、今は明日の瞬間を逃したくない。英国のテレビ・チームも取材に来ているし、いざとなったら何とかなるだろう。

その夜は、キャンプの空家に泊めてもらえることになった。その中にカラガイというゲリラがいた。彼にこの国の主食である「サザン」というトウモロコシ粉を湯がいたものを作ってもらい御馳走になる。彼といろいろ話すうちに私は眠りこんでしまった。